

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02783

研究課題名(和文) 小学校英語教科化に備えた単語認知メカニズムの解明と4技能を統合した語彙指導法開発

研究課題名(英文) Exploring the Mechanism of Vocabulary Learning Strategies by Japanese Elementary School Students and Teaching Methods of Vocabulary Integrating Four Skills Toward English Teaching at Elementary School

研究代表者

平野 絹枝 (Hirano, Kinue)

上越教育大学・その他部局等・特命研究員

研究者番号：30123219

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：小学校英語の教科化に備えて日本人小学生の英単語認知・学習のメカニズムの解明を目指すために、公立小学校4、5、6年生(327名)における英単語学習方略使用の認識に関する調査を行なった。その結果、「イメージ化・グルーピング」「反復・練習」などの5因子が抽出され、英語力、年齢(学年)、性差が使用方略の認識に影響を及ぼすことが判明した。この語彙学習方略調査の結果にもとづいて、次に、英単語理解の指導法を提案した。さらに、児童向けの、発表(主に書くこと)を中心にした語彙指導法に向けた単語テストを作成し調査した。その結果から、理解(聞くこと)と発表(書くこと)を統合した単語指導法について提案した。

研究成果の概要(英文)：For English teaching at elementary school, the purposes of this research are (a) to investigate Japanese elementary school students' vocabulary learning strategies and the relationships between their English vocabulary learning strategies, language proficiency, grades, and gender, in order to explore the mechanism of their vocabulary learning, and (b) to develop an effective teaching methodology for word comprehension utilizing strategies and that of integrating word comprehension and production for Japanese elementary school students based on the results of the questionnaire on strategies. The findings revealed that five factors of the strategies were extracted for fourth, fifth and sixth graders (n = 327) and the variables including English language proficiency, grades, and gender affect their awareness of the use of vocabulary learning strategies. Suggestions and effective examples concerning the teaching methodology of word comprehension and production were proposed.

研究分野：英語教育

キーワード：英語語彙学習方略 小学校英語 英語力 学年 性差 単語理解・発表 方略指導 単語指導

1. 研究開始当初の背景

日本人小学生が英単語をどのような方略を用いて認知しようとしている可能性があるかに関する研究はほとんどなかった。そのため、日本人小学生が認識している英単語認知方略を明らかにすることができれば、それに応じた効果的な指導法を考案することができる可能性がある。よって、研究課題1, 2, 3を設定することにした。

研究課題3については、来たるべき「教科化」に備えた、単語認知メカニズムに基づいた4技能を統合した単語指導法が開発されていないために開発する必要があった。

2. 研究の目的

(1) 研究課題1の目的は、小学生の英単語認知のメカニズムの解明することである。Part1では、日本人小学生が英単語を学習する際に使用している語彙学習方略に対する認識と学年と英語力の関係を明らかにする。Part2では、日本人小学生の英単語学習方略と英語力と性差の関係を明らかにする。

(2) 研究課題2の目的は、(課題1の結果にもとづいて)英単語認知・理解における効果的な語彙指導法を開発・提案することである。

(3) 研究課題3の目的は、小学校英語の教科化に備えて、「聞くこと」と「読むこと」の単語認知から、単語を使って「話すこと」及び「書くこと」までの4技能を統合した効果的な指導法を開発し提案することである。

3. 研究の方法

(1) 研究課題1 (Part1, Part2) 及び 研究課題2

参加者

公立小学校2校に在籍する児童327名が参加者であった。4年生57名(A校), 5年生143名(A校とB校), 6年生127名(A校とB校)であった。英語力の上位群と下位群を比較するため、2015年12月から2015年12月から1月に実施した英検 Jr. 学校版 BRONZE(45点満点)の平均値($M = 37.72$)を基準として、上位群(185名)と下位群(142名)に分けた。男子(169名)の平均値=女子(158名)の平均値であった。

材料

「語彙学習方略使用の認識」についてのアンケート(計39項目)を実施した。5=「非常にそう思う」から1=「全くそう思わない」の5段階尺度によって構成されていた。このアンケートは、堀田・平野(2013)において5, 6年生を対象にしたアンケート45項目を精選し、少し改訂したものである。

手順

2016年2月に語彙学習方略使用の認識に関する質問紙調査を実施した。アンケート調査時間は平均20分から30分であった。

(2) 研究課題3

単語を発表(「書くこと」)させるために、

どのような指導法が適切であるか検証するために、4技能の中で受容(「聞くこと」と発表(「書くこと」)を考慮した単語調査を実施した。その調査に基づいて、単語指導法を提案することとした。

調査実施日：平成30年3月12日(外国語活動が終了した時点)

実施小学校：新潟県上越市立K小学校

参加者：6年生27名

設問内容

単語の選定に関しては、児童にとって身近な単語を考慮して、聞いたり、実際に使うことができる単語を選択した。単語に関する調査と同時に、アルファベット(26文字)の大文字・小文字も書かせた。

設問は、聞こえた英語に合う絵(4つの絵から該当する絵)を選択、及び聞こえた英語を書くことである。全部で12問である。

- (1) elephant (2) umbrella
(3) watermelon (4) yacht (5) apple
(6) zoo (7) bird (8) ghost (9) nest
(10) mouse (11) kangaroo
(12) xylophone

さらに、児童にアルファベット26文字(大文字と小文字)を書かせた。

方法：事前に準備したCD(ネイティブ・スピーカーによって事前に録音)を使い、各々の設問を2回ずつ流した。

4. 研究成果

(1) 研究課題1 (Part1 と part2) の研究成果

Part1では、日本人小学生を対象にした英単語認知方略に関するアンケート調査の因子分析によって明らかになった因子は次のとおりである。

- 第1因子：「類似性着目」
第2因子：「イメージ化・グルーピング」
第3因子：「アルファベット着目」
第4因子：「興味・嗜好優先」
第5因子：「反復・練習」

さらに、Part1において、これらの因子を学年と英語力の違いによって分析した結果では、第2因子(イメージ化・グルーピング)において、全体で英語力上位群の平均が英語力下位群の平均に比べて有意に高く、英語力下位群は、「イメージ化・グルーピング」という語彙学習方略があることに気付いていない可能性のあることがわかった。また、Part2では、学年の枠をはずして性差に着目して分散分析を行ったところ、5%水準で女子 > 男子となっていた。性差によって、児童が気付くことができる因子には違いがあることが明白になった。

研究課題1のPart1では、第5因子「反復練習」は、学年を問わず、全体で上位群の平均が下位群より高かった。成績上位群は、「反復して練習する」という学習スタイルを経験

的に知っているからという理由によるものと推察された。さらに、研究課題1のPart2での分析で明らかになったこととしては、上位群において、男子 = 女子ということで性差がなかったが、下位群においては、女子 > 男子というように性差が見られた。男子では、上位群 > 下位群であり、女子では、上位群 = 下位群であった。

ゆえに、第2因子と第5因子は、英語力の上位群と下位群、性別の男女差によって、児童が自ら気付くことができる因子には違いがある可能性のあることがわかった。

(2) 研究課題2の成果

課題1の成果にもとづいて、以下のような英単語認知・理解における効果的な語彙指導法を開発・提案する。

Part1、Part2の成果にもとづいた単語理解の効果的な指導法の開発

本研究では、同じ学級のなかにいる子どもたちであっても、英語力と性別の違いがあるため、児童自らが気付くことができる英語語彙学習方略には違いがあるということである。児童が自ら気付くことができる語彙学習方略は異なるため、教師は授業において、子どもたちが対話を通して、主体的に方略を発見できるような学習活動の場を提供する必要がある。具体的な学習形態として、ペアあるいはグループ(学習生活班)を取り入れた授業づくりが望まれると言える。英語力の上位群と下位群、および、男女の性差によって、小学生の英語語彙学習方略の使用認識に違いがみられるため、授業ではそれらの特性をもった児童が混ざり合うようなペアあるいはグループ編成を指導者が意図的に仕組む必要がある。

授業展開としては次のような指導法の提案ができると考えられる。指導者は、「英単語の覚え方 - いろいろな方法を見つけて、みんなに発表しよう - 」という学習課題を提示する。ペアあるいはグループの児童は、アイデアを発表し合い、多くの方略を見つける。次に、ペアあるいはグループ内で見つけた語彙学習方略をワークシートに記述し、クラス全体の児童に伝えられるようにする。その後、クラス全員の児童が、さまざまな語彙学習方略を知るというものである。また、学級によっては、クラス全体で出された語彙学習方略を児童自身が類型化を行うという学習活動も考えられる。クラス児童が自分たちで名付けた語彙学習方略を短冊のようなカードに記して、それらを教室掲示しておけば、児童が英単語認知において活用できる可能性がある。

Part1で抽出された5因子の方略における、因子を活用した指導法についての提案

【その1】

第1因子：「類似性着目」

第2因子：「イメージ化・グルーピング」

第3因子：「アルファベット着目」

<英単語認知の学習活動A>

(上記の3つの因子を絡めた学習活動を活用した指導法の提案)

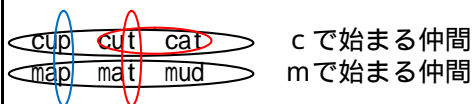
20語の英単語が一つずつ書かれたカード(計20枚)を学習生活班に1セットずつ配付する。

見た目で似ている箇所のある単語をグルーピングする。グルーピングの視点としては、次のような例が挙げられる。

- ・見た目の何らかの特徴
- ・英単語(アルファベット)全体の形
- ・英単語の最初または最後のアルファベット
- ・英単語のもつ意味上のグルーピング
- ・発音が似ている
- ・アルファベットの並びに何らかの特徴がある。例)(look)「oo」「目が二つある」など

できあがったグルーピング例を発表しあい、どのような視点で英単語をグルーピングすることができるのかについて対話的に児童が学ぶ。

<グルーピング例>



pで終わるグループ

tで終わるグループ

上記のような活動を通して、英単語の覚え方に関する知識を広げることができる。

【その2】

第4因子：「興味・嗜好優先」

第5因子：「反復・練習」

<英単語認知の学習活動B>

児童が自らの興味・嗜好に基づいて優先的に英単語を覚えようとする傾向があることから、小学校外国語活動、小学校外国語におけるコミュニケーション活動では、児童が自分自身の気持ちを表現することができるようなテーマで対話活動を取り入れることが大切である。別の言い方をすれば、児童が自らの興味や嗜好に基づいて、自らの気持ちを発言できるようなテーマでコミュニケーション活動を行わせる授業が必要である。自らが興味もったり、嗜好したりしている英単語であれば、それを友だちに伝えるために、何度でも、繰り返して、友だちに伝えるコミュニケーション活動を授業に仕組むことができる。すなわち、小学校における外国語活動や

外国語では、自らの気持ち（自らの興味や嗜好）を英語で語るコミュニケーション活動場面を取り入れることで英単語学習しやすくなり、それを友だちに話すコミュニケーション活動を通して、知らず知らずのうちに、何度も繰り返し発話してしまう（何度も目にする、繰り返し英単語に触れる）ため、英単語の学習に効果的に働く可能性があると言える。

児童が自ら発言したくなるようなテーマにおいて、児童が英単語を自在に選択して、対話できるようなダイアログを設定する。

児童は、黒板に提示された英単語のうち、自らの興味や関心に基づいて、使用したい単語を選んで、友だちと対話する活動を繰り返し行うようにする。

例) 対話例

「好きな動物が同じクラスメートを見つけよう！」

児童A: Do you like dogs?

児童B: No, I don't. I like cats.

児童A: Do you like dogs?

児童C: Yes, I do.

児童A: Me, too.

(児童Aは、児童Cの名前を記録し、他のクラスメートに同じことを繰り返し、尋ねて歩く活動に取り組む。)

対話ゲームが終了したところで、同じものが好きなメンバーが何人集まったかどうかを発表する。

この活動を通して、児童Aはまず自らが興味をもっている dog を学習し、その英単語を身に付けることができるが、自らが関心をもっていない cats であっても、友だちから繰り返し、聞かされることにより、cats という英単語の学習にもつながることが予想される。

以上、これまで見てきたように、主体的、対話的な学びを通して、子どもたちがお互いの英語語彙学習方略を共有し、自らの興味や関心のある英単語を用いたコミュニケーション活動を積極的に授業に取り入れることを提案したい。コミュニケーション活動は、他のテーマであっても成立する。要は、児童が自ら語りたいことを語りあえるようなテーマを設定し、意味のやりとりのあるコミュニケーション活動を授業に取り入れる必要があると言える。

ところで、こうしたコミュニケーション活動は、小学校外国語活動、外国語において広く行われているが、第4因子:「興味・嗜好優先」、第5因子:「反復・練習」という観点からも、自らのこと、気持ちを語るというテーマでコミュニケーション活動することの必要性が本研究によって再認識されたことは意義深いと考える。自らの気持ちを語るというコミュニケーション活動は、英単語を効果的に覚えるためにも必要であることが明白となった。

最後に、英単語指導を行う指導者は、児童

が5つに代表されるような英単語認知方略があるということ意識して、授業づくりを行うことが大切である。ある授業においては、類似性のある英単語を取り上げることが効果的である場合もあれば、逆に、類似性のある英単語を取り上げて提示することがその授業のねらいの達成を妨げる場合もある。また、その授業においては、イメージ化しやすい英単語を集中的に取り上げることが効果的であると判断すれば、積極的にイメージ化しやすい語を積極的に授業に登場させるという観点(基準)で単語選定を行ったりする必要はある。

指導者は、本研究によって得られた知見に基づき、その授業時間に取り上げる英単語が適切か否かをその授業のねらいに沿って考えるなどの視点をもつことが必要であることが明らかになった。児童が類似性に注目する傾向があるという児童の実態を充分に考慮し、その授業時間に取り上げるべき英単語の選定を注意深く行う必要がある。指導者は、本研究で明らかになった因子を参考にして、その授業で取り上げるべき英単語と、取り上げるべきではない英単語を取捨選択する判断を行う必要がある。

(3) 研究課題3の成果

当初の研究目的は、受容から発表に至る4技能を統合した指導を開発することであったが、本研究では、受容は、「聞くこと」に、発表は「書くこと」に焦点をおいて提案をしたい。

英単語テストの結果においては、調査を実施した小学校ではアルファベットを書くことに関しては、『Hi, friends 1,2』を利用して、児童はアルファベットの大文字と小文字を書こうとしていた。平均すると、大文字では24文字、小文字では18文字を書くことができた。更に、児童は、大文字の方が小文字より書くことが容易であるだろうということがわかった。

単語(語彙)に関しては、「聞いた」単語の絵を選択できるかについては、12の単語の中で8つの単語を認知できた。しかしながら、「聞いた」単語を表現(「書くこと」)まではほとんどできなかった。12個の単語の中で平均1.19に過ぎなかった。今回調査した小学校では、26文字のアルファベットの指導は、『Hi, friends! 1・2』のとおり実施されていたが、単語を書くことまでは至っていないと考えられる。その単語の中で、3文字以下の"zoo"に関して27名中の10名の児童が書くことができた。他の単語は、ほとんどできなかった。たとえ、単語を書こうと試みた児童は、ローマ字で該当する単語を書こうと努めていたことがわかった。

児童の自由記述の中でも、「アルファベットは大体書けるようになったので、単語も書けるようにしたい。」という感想(意見)もあった。

小学校段階では、第一にアルファベットの26文字を書けるようにしたい。特に、小文字は大文字より練習が必要である。

その文字を書くことが十分に指導された後に、児童にとって身近な単語を取り上げながら、特に、最初は3文字程度の単語から指導を始めることにしたい。その際に、今回は4技能のうち2つの技能であったが、受容技能と発表技能という観点からは、発表技能である、小学校段階における単語を表現すること(書くこと)は、「繰り返し活動」(反復練習)を導入しながら、書く楽しみを増進するような活動を取り入れる必要がある。その際、単語の「なぞり」を取り入れると書こうとするだろう。4技能はそれぞれ関係性があるので、発表(「話すこと」「書くこと」)をさせるまでには、十分な受容(「聞くこと」や「読むこと」)の練習活動も必要であるだろう。

具体的に、反復練習をする中でクロスワード・パズルのような練習を取り入れて楽しく単語の練習活動をするような工夫も必要であろう。例えば、「空いている視覚のマスに文字(アルファベット)」を書く練習をしながら、単語を書けるようにしていく(図1)。

次に、イメージ化をできるような、ピクチャーカードを工夫することである。例えば、ピクチャーカードの中に、単語の頭文字を入れた絵が描かれているようにすることもあってもよいであろう(図2)。単語を表現すること(「書くこと」)は児童にとっては難しいことなので、イメージ化をしながら、反復練習をする必要があるであろう。

今回は、4技能のうち、「読むこと」と「話すこと」の単語指導法にほとんど言及ができなかったが、4技能はそれぞれ別個の技能ではないので、今回の指導法に組み合わせ、他の技能を統合した指導法を開発することが今後の課題である。

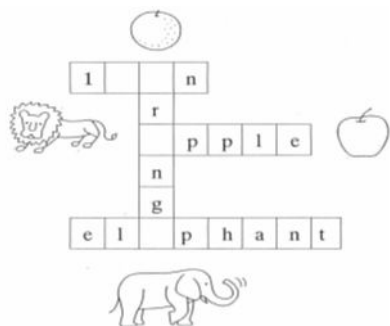


図1 単語練習の工夫(石濱(2001)から引用)

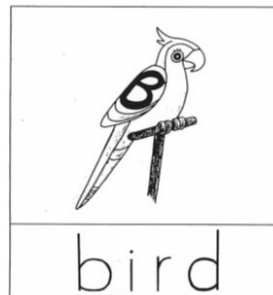


図2 ピクチャーカードの例(石濱(2001)から引用)

<引用文献>

- 石濱博之(2001).「文字(アルファベット)指導の事例研究-公立小学校英語クラブにおける「英語活動」の実践報告-」,『聖霊女子短期大学英語科紀要』第8巻, 63-78.
- 堀田誠・平野絹枝(2013).「小学生の英語語彙学習方略に関する調査」,『日本児童英語教育学会研究紀要』第32号, 111-127.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

石濱 博之・藪下 克彦 (2018).「外国語活動の授業で手品(マジック)を導入する試み-コミュニケーションの手段としての手品(マジック)のあり方-」,『鳴門教育大学研究紀要』第33巻, 119-131. (査読無)

平野 絹枝・堀田 誠・酒井 英樹 (2017).「小学生の語彙学習方略使用の認識・学年・英語力の関係」,『日本児童英語教育学会研究紀要』第36号, 33-51. (査読有)

石濱 博之 (2016).「アルファベットを書くことの指導に関する事例報告-継続した指導結果を比較して-」,『中部地区英語教育学会紀要』第45号, 163-170. (査読有)

[学会発表](計4件)

平野 絹枝・堀田 誠・石濱 博之,「小学生の語彙学習方略使用の認識・英語力・性差の関係」,全国英語教育学会第43回島根研究大会,2017年8月19日,島根大学(島根県松江市)

石濱 博之,「小学校外国語活動における児童の聴解力の変容について:1年間の外国語活動が聴解力に及ぼす影響」,第

29 回四国英語教育学会徳島大会 ,2017 年
6 月 17 日 ,鳴門教育大学(徳島県鳴門市)

平野 絹枝・堀田 誠・石濱 博之・酒
井 英樹 ,「学年と英語力が小学生の語彙
学習方略使用の認識に及ぼす影響」,全国
英語教育学会第 42 回埼玉研究大会 ,
2016 年 8 月 20 日 ,独協大学 (埼玉県草
加市)

木下 泰徳・石濱 博之 ,「外国語活動に
英語人形劇を導入した授業実践の報告：
児童の単語認知と情意面との反応に焦点
をあてて」,第 16 回小学校英語教育学会
宮城大会 , 2016 年 7 月 23 日 ,宮城教育
大学 (宮城県仙台市)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

平野 絹枝 (HIRANO, Kinue)
上越教育大学・その他部局等・特命研究員
研究者番号 : 3 0 1 2 3 2 1 9

(2)研究分担者

石濱 博之 (ISHIHAMA, Hiroyuki)
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号 : 0 0 2 2 3 0 1 6

堀田 誠 (HOTTA, Makoto)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号 : 2 0 7 8 0 6 4 6

ブラウン アイヴァン (BROWN, Ivan)
上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教
授
研究者番号 : 8 0 4 3 6 7 7 4